

145  
153.41

をとせりとくぐるのまが  
なきとおとおの振  
おとくじふとくつき  
おとおとくうぐるよ  
とくちくくしてり  
トさるのすむむすの  
トみぞあよくら城  
おとす法方の歎を  
翁よあひわくうて  
ときべんゆくくうて  
用ふのとくもあくく  
どろ去一人もあく  
タク吉先ちくの  
まみくまとお  
くけきくとくとく  
とくへいのゆとく  
アリ木戸石りけた  
タクれひと西三十人皆  
中のあんあいをアスル  
とてあこようそ  
スルふ皆教日のつ  
ともちす林ひう  
かくうる



とひきでうへ  
たとわうふくを  
えともわれうる  
我生あともらひ  
うりゆもとみのり  
たへ君う一玉よ  
あつまうめをめ  
日の字解字  
てゆうげはの  
うとまて何まる  
夜うち努力さま  
で大勢うてゆ  
ト一跨うる  
け余さうとも安  
てくあんのとと  
ね門をもわ  
ぞくちうら二  
面金へた刀共  
刀のやこえを  
らぐをざとう  
ひなれれを火次  
けふさうんうて  
ゑくよまと  
せじあくと  
おの尾きか  
きちらり





まちやねふね門へ書  
ひろ山をもちらして  
ちらもふ屯をもる  
とまくへんべまくべ  
よせとてゑを登  
秀ひ三万移すと  
十日月の己のこく  
ようう黒むぞ向  
とや四ひなん口き  
今まの中をと  
空をぐるわ門を去  
もくとらとよせと  
甲をねひぐくは  
ぞ出ふり先一そく  
みあへくさの勢  
を始とて下社  
ちがりんを坐因番  
えのとく我生よ  
とくさんと大わい  
よく大勢ふあうお  
合七万五千余騎と  
てあうとことんのこ  
へとぞ上うりくる  
ね門へ軍勢今く一  
万騎ともとくぎく  
なれぬみ年石亭と  
の老れあれひ面く  
せ死とござめてゐ  
うく年のか





ねもみ流經の  
くらめすらう攻  
へ敵をそよてて  
かうへり。今わ  
より二十余ヶを  
のうち合ひよる勢  
のうち合ひよる勢  
ゆきけせ我身  
もうともせむか  
ひねよん敵と  
もうともせむか  
ひねよん敵と  
ゆきてそうちが  
あんのとと浦  
うれてそうちが  
あんのとと浦  
間あふときそらう  
と仍く田原千尋  
降へくり入に角ハ  
面よ切てとうくけ  
ゆけてまくと見え  
きがちや十七猪  
ありう今へ是  
生とち陣ふるう  
やるは強ニ方のせ  
め口ずれてまく  
署付記はい敵の  
を付ぬよもあお  
せらんと弱一文字  
みうち切て其刀を  
ね門が氣よ並て  
うづに伏う



まふむちの隣へ文登  
みるをもくらうりうは  
すうる室やつきて云せ  
そや町とふれへわる  
のれらうわふもゑ  
けくうわふもゑ  
風もぐく吹えで  
方二十丁うちふ三  
十余ヶ不固付よ  
りくとうされ  
ゑくう天地  
とうをあゑ  
火东西よさえ  
あるモトくう  
二万余株の去  
れへてことよ切  
やせうとふん  
休せ生どうぞ  
どうゑくう  
きも金銀を  
ちうをや一ま  
ゑ一宇ものこす  
ゆりをうけう  
みゆううをきく  
ちせうせふみけ  
よひ火ゆつまざ  
よともひくすよどれ  
まうもありゑね  
ゑきね次第う





かてね門も勢三面  
余馬をあづべ今と  
きのことあうて  
えまを秀吉の  
あ勢三万余  
猪とひく  
よるとあひ  
すたうくさよ  
えよくわ  
くよみひひ  
息ともうせすよ  
くふくえれ  
ろきんの交とる絨ふ  
ひれ云六猪よろ  
い甲をからずみひと  
すふ生立せ岡もの  
るふのまくむ時も一  
ふとこもあうぞく附  
あきへりとお門と  
アリケテくた今と  
もとのどく七猪のお門  
うをえをあく下うあ  
すりひなく秋ひ亡猪  
悪く外ちのかの  
去はれる程よ  
今ね門一人よそ  
あうふく





さうわみへ三す余務  
とて平ニ黒任のあす  
余務とうひ合せ自敵  
を切ゆ十一務陣とやう  
ゆハケをあうりうりびゆ努  
參く付きて二石務」ぞ  
みよくるからてよね門付  
きくろト「款陣のとんの奴  
をべせもほのくちをう後六務  
かくはふううて又るふ一ぞくとく復  
ね十人耗とあくびびい」とぞや  
くくわらさん抜き切んとくろ  
ふよ歎とんろもろくくうれ  
を先ぞもひづり起りのねひと  
大物より合荒川筋ふと  
なもあく引くんうおゐて  
をきくてそとく才はハ  
量とえてねあきらむの  
まざくともとて三刀さ  
きよろふと參くそと  
くれもとす想家ふきの一れ  
百九十八人とくこうてお  
きそりかあとの余とう十  
方ふりうきてそりがく  
去承平二年より今天慶ニ  
年と春秋九年ぐるの姿も  
未後十日ふ一円ほれ素てびく



同駒八

卷之二

三

五郎持為まきじや

17

A vertical woodblock print illustration depicting a scene from a Japanese narrative. On the left, a figure in traditional samurai-style armor stands prominently. The figure wears a helmet with a plume and a patterned tunic (kamishimo) featuring a repeating geometric or floral motif. To the right of the figure is a large, weathered wooden structure, possibly a gate or a large barrel, with visible vertical grain and some horizontal markings. The background is minimal, showing some stylized foliage and a path or clearing. The overall style is characteristic of Edo-period book illustrations.

大あゝゑにアわ辛  
がえゝそひとある  
すとひよりうか  
ちのをそひまくあ  
れぞうふよものう  
ねざりんれんぢ阵  
のいぢくの中ふみ  
のうりうげ門付め  
きとうとアくて  
敵のとんの勢ろを  
ちくゆくくれを  
ちらうどうま田  
ひ夜叉よそさ  
うてそれうそと  
しきひくれを  
いや」や  
太かうめ  
そうち  
かとま  
「ぐふよ  
くらうてえの  
ぞうれ付て  
ぞう



卷之二

七夜

かて法大ねりひぢん  
の後わ門へ首けび  
い一ちうりく七条川原  
コテ武士のみより更  
きてぞくしよ年わ門  
と名とちて东洞院  
の大活をゆくり  
ぞく門の方のもやもの  
木ふくりる洛中の  
老巣帝とてえも  
いきすいのくみきの  
東夷の親王とくづ  
くでくとめてあざ  
くれ今いはくろのき  
くと或せらふね門へ  
そく木ふくりてこ  
月ととのちくせぢす  
れりくらどくとて服  
とよきくず牙とくえ  
で我くどとりりき  
よきとつひて今一  
军せんとよあくよべ  
こそりく時みほる人  
ね門へあくとよぞ  
まきよきる傳説を  
たうりとみゆく  
とくえスルれば首



ち記よりえきをあづけ生どう対  
死のそとて二百六十二もの  
りのうちありとて竹やひづり  
をふるよみりくさうるへらゆ  
をあす小ちもあおも事じひるよ  
くらゆと令とどきと老ぬ各々七  
子三百余人ありくて奉事の  
山よいをくともを谷川まで  
大刀長刀の血とあわせてく  
こゝへ牢らうてうききりと多く  
とをもまをあへてくるも  
くろふれぢ兵士がくび  
くろくられはむけ失ふる  
ゆん大まくのわゆうや  
ゆんとらねうるや  
ゆん大まくのわゆうや  
ゆんとまくべんよわ  
さうゆるから不よ  
上徳園のひじらやうお  
ゆと生どうてあと  
どよのせりりあうて  
あらんよとるよあわ  
ひあたの引出わと下  
されやうて奥深うそ  
をわるよ又あなたよれ  
とえちうてう本よ  
そくさき



天慶三年三月廿八日  
法大内放ふくひだんせり  
せきる先陣小へ上平  
を負盛同平次繁  
譽平三兼任  
を始とて  
宗佐の一门  
三十余騎放合  
其勢又方余騎後  
陣みへ回采菱ち秀郷  
自當方大名千時三郎千春  
三郎千國に郎千種を  
始おほえふ一族八十餘人  
其勢徳て六万余騎  
複甲大カカツ靴  
本よひるまで  
花とさう

そとませ  
さう  
東  
活中の  
貴様ちやこ  
みかてそくねと  
ゆのてい城よりと



又べよう同月廿九日  
アヌドの所而會行つま  
今くがお園にて大切の  
貴様のちうせうとゆは  
せうるをとて左大臣と  
仲平右大臣恒佑と始  
とて公卿職事隊の始  
除日ありて秀郷秀  
郷と後に位下とまづ  
け武姫と號あ國の  
ち小仕せう上平大  
貞登へ委嘱より  
車よ役へ位下不叙  
して大弓助は位下  
大蔵下總二ヶ園と  
楊る平次襲登へ上位ち  
平ニ義任へ上位ち甚  
か吾ふちよぐひ度深よりてみ不ナケレの  
石舟と號すお城せぬふくうりゆゆを東園大  
平ふ活り一事これ重宝のあらとどりひかづ  
伊ふあらのな我ふ儀きと其威をえどとめりき  
とをわくへてめでたひ代のりとあそひとふれひ

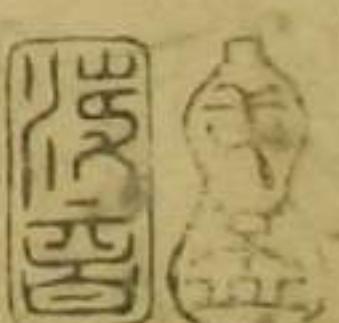
畫工

紅翠齋門人

北尾蕙齋政義

彫工

朝倉 権八



三楠實記

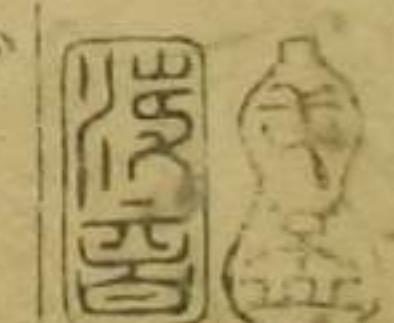
續三  
五冊

續後三楠實記

續三  
五冊

續

岡本 松魚



寛政五年癸丑正月吉日

江戸淺艸第三丁目 秩父屋庄左衛門

江戸本杖木町一丁目

西宮

新六

地本問屋

同通油町

鶴屋喜右衛門

正

